

## 2. 基調報告概要

「日本のマンガ文化と海外への越境現象～少女マンガを中心として」

大城房美(筑紫女学園大学文学部教授)

はじめに

国際共通語 lingua franca としての MANGA

MANGA はもはや日本マンガを意味しない

\* 日本マンガ=Japanese manga \* 少年・少女・青年・女性

(1) 現在の市場と歴史 — 京都国際マンガミュージアムより資料提供  
市場=「日本ではおにぎりよりあふれているたくさんのマンガ」

歴史(海外との関係) =ハイブリッドな文化としてのマンガ

19世紀末-20世紀初頭 欧米からの影響 *Puck* など

戦後 アメリカンコミックスやディズニーからの影響

～80年代 海賊版でマンガが広がるアジアとマンガ市場が困難だった欧米

90年代～ 韓国や台湾で、マンガの正規版

ドラゴンボール/セーラームーン/ポケモン

00年代～ NARUTO (*SHONENJUMP*) フルーツバスケット(TOKYOPOP)

などのヒットが続き、グローバルなマンガ・ブームが起こる

\* 「日本」を重視する傾向が生じる。「マンガスタイル」の採用など。

\* 国際共通語としての MANGA の出現

(2)現在のマンガ受容の特徴—「女性」「少女」

21世紀におけるコミックスの流通 女性読者が貢献?!

海外のコミックス文化の多くが少年をターゲットとしている。

図書館・本屋(コミックス専門店ではない)・ネット(ブログやファンダム)

少女マンガスタイル = 現在のマンガやアニメのスタイルとのつながり

大きな目、長い手足、きらびやかなファッション、女性作家が描く、無国籍的表現

\*70年代はネガティブな見方がなされた (少女でない読者からの批判)

—しかしその表現は

ジェンダーと国籍が曖昧 & 少なくとも、「男性」と「日本」でない表現

少年が中心となる海外のコミックス文化への挑戦

00年以降のMANGA作家の出現「女性」の作家と読者の増加

Jo Chen (Taiwan), Tania Del Rio (USA), Svetlana Chmakova (Canada),

Queenie Chan (Australia), Christina Plaka (Germany), Emma Vieceli

(England), Kaoru (Malaysia), Anzu (Indonesia), FSc, (Singapore) etc.

\*海外で活躍する多くの女性作家の作品に「少女マンガ（的）スタイル」がみられる

(3) MANGA の魅力へ繋がるもの ジェンダーをとの関わりを中心に

(a) KAWAII 無国籍性 + 女性性

\*少女マンガスタイル

「欧米」の主流であったアメコミや B.D. (少年文化中心) に挑戦するスタイル

\*マンガ文化に付随する価値観 kawaii という「美意識」

自分の世界 + 美意識に関する自分の評価基準

(b) 物語展開の重視 “sophisticated”

人生における多様なロールモデルの提供

キャラクターの成長, 繊細な感情表現, など (アメコミや B.D. とのちがい)

(c) ジェンダーによって固定化された役割の多様化/柔軟化

少女・女性マンガー日常生活のなかで「男性と家事 (料理, 育児)」を描く

(少年/青年マンガでは、「料理人」という立場で料理をする男性は多い)

(d) ジャンルの越境

70年代: 少女マンガで「少年」を主人公にして性を描いた女性たち (BL やおいへ)

少女マンガで「女性マンガ」を描いた女性たち (女性マンガ誌 1980~)

70年代後半から80年代: 少女マンガ家が少年マンガ誌に連載を始める

少年マンガにラブコメが描かれる

80年代~: 少女たちに人気の高い少年マンガ (二次創作へ)

『キャプテン翼』『幽☆遊☆白書』『SLAM DUNK』『テニスの王子様』など

90年代~: 青年マンガ誌に描く女性作家 (少女マンガ家) たち

『おたんこナース』『働きマン』『ヘルプマン』『きのう何食べた?』『プロチチ』

『3月のライオン』 etc.

(4) 日本マンガ・MANGA によるそれぞれの表現の可能性

\*日本マンガのシステム (商業誌) 「少女」「少年」「女性」「青年」

→グローバルな女性文化の可視化 女性読者・女性作家の成長

\*MANGA → 国籍と性別に縛られたジャンルを越境するメディアとしての可能性

→より多様な生のあり方を描き / 伝える表現を提供する